

ツシマニセハイイロハナカミキリの幼虫・蛹

境 良朗・日下部 満

ツシマニセハイイロハナカミキリ *Rhagium pseudojaponicum* Podany, 1964 は対馬産を基に記載された種で、国外では朝鮮半島と済州島に分布している（藤田・平山・秋田，2018）。これまで対馬での寄主植物はアカマツだけが確認されているようだが、アカマツの対馬での分布から推測すると産地は局地的で個体数もさほど多いものではないと考えられる。筆者らはアカマツの伐採木の樹皮下から成虫を得るとともに、幼虫や蛹を観察することが出来たので報告する。

採集・撮影データ

- ・数頭，対馬市厳原町豆酏（豆酏崎），12. II. 2019，成虫・幼虫・蛹を確認
- ・数頭，対馬市厳原町豆酏（豆酏崎），21. II. 2019，動画撮影

成虫

筆者らはここ数年、現地のアカマツの立ち枯れや倒木で探索をしてきたが、直径 10cm ほどの比較的新しい倒木からわずか 1 頭を得ただけであった。かなり丹念に探したがこの個体以外発見できず、立ち枯れそのものを好まないのか、あるいは倒木が古過ぎたのか判断できずにいた。今回、積み上げられた比較的新しい伐採木の樹皮下から特徴的な蛹室とともに多くの新成虫を見つけることができた。



蛹室に留まる成虫



蛹室から這い出した成虫



左：♂13mm 右：♀16mm

豆酏崎は対馬で最もアカマツがまとまって見られる特別な場所であったが、松くい虫の被害を受け多くは枯死してしまった。かなり長期にわたって薬剤散布とともに被害木のビニールシートでの被覆処理などが行われてきたが、被害を食い止めることはできなかった。このままではこの産地のアカマツは数年の内に消失してしまい、本種も姿を消すことになるだろう。

幼虫

本種の生態が近縁種と同じであるならば、幼虫はアカマツの樹皮を食べて育ち、羽化後そのまま蛹室に留まり、越冬して翌年の春に野外に出ると考えられる。従って、この時季にわずかながらでも幼虫が見られたことは本種が一部 2 年 1 化であることを示唆している。日下部は幼虫を持ち



樹皮下の幼虫



樹皮下の幼虫（別個体）

帰り、飼育を試みたが蛹化に至らず死亡した。幼虫に近縁種との形態の違いなどはあるのだろうか。

蛹

蛹室内にいくつか蛹も見られたが、全て変色し死亡していた。

体の一部が白いカビ状のものに覆われ、菌に侵されたと思われる蛹が見られた。高湿度が蛹に悪影響を及ぼすのではないかという印象を受けた。



菌に侵された蛹室内の蛹



死亡し黒変した蛹



蛹（背面・側面・腹面）14.5mm

最後になるが、日頃より甲虫全般についてご教示いただいている熊谷豪氏にお礼申し上げる。

引用文献

藤田宏・平山洋人・秋田勝己，2018 日本産カミキリムシ大図鑑(I)，184